

# 九月一日

水上瀧太郎

青空文庫



八月三十一日の夕方、朔ついたち日から学校の始まるちいさい子供達を連れて、主人夫婦は東京に帰る事になり、由井ヶ浜の曲まがりぶち淵淵の別荘には、九人の人数が残る事になった。長男の一郎と、長女の甲子と、次女の乙子と、夫人の里の遠縁の者の娘で甲子や乙子の世話をする養子ようこと、一郎の同級生の澤と、女中の延のぶと鉄と、別荘番のじいやとばあやがいた。外ほかには英国種のポインターの年をとってよぼよぼしているのがいた。

行儀のいい事を何よりも好む、神経質で口やかましい主人がい

なくなつたので、いい合せたようにみんなの心持は愉快に自由に  
放ほうじゆう縦ゆうになつた。停車場へ送つて行つた歸りに、一郎は外の者  
に別れて、一の鳥居の側そばにいる岡部の兄きょうだい妹いを誘つて、ホテル  
に出かけた。夏中そのの舞踏場で、一郎の連中は、亜米利加アメリカの女  
や日本の令嬢達と踊つたが、今はもう客も少なく、比律賓ヒリッピンから  
夏場の稼かせぎに来ていた楽手達も、小金をためて帰国してしまつて、  
涼しい風の来る広い板の間に並べた卓について、飲料をとる人影  
もなかつた。それでも一郎は楽しかつた。目の前に明るい顔をし  
ている友達の妹の心を、この頃になつて、漸ようやくしつかりと捉えて  
しまつた確信があつた。いつでも、こつちから求めさえすれば、  
求めるものは容易に与えられそうないきいきした希望と、流石さすがに

それに伴う軽い不安とに、若々しく、健康で、浮気な胸をおどらせてていた。

一郎と別れた外の者は、滑なめりがわ川がわに沿った砂山から海辺に出て、夕日の沈んで行く頃の、めつきり秋めいて冷つめたなごさい渚なごさに、下駄はだしや裸足はだしの跡を残して歩いて行つた。

中学時代から同級で、学問でも世間智でも、お坊ちゃん育ちの一郎と比べると格段に立勝たちまさっている澤は、先年父親の死んだ時、学資の関係で廃学しなければならなかつたのを、一郎の父が息子の良友と見込んで、毎月の衣食費から月謝まで補助する事になつたのであつた。来年学校を卒業すると、一郎は洋行するはずになつていたが、澤は主人の主宰している会社に雇われる事にきまつ

ていた。彼は小学時代から優等生の誇ほこりを持っていた。模範的の学生だという自信もあつた。郷里では旧家として知られていたが、母は早く死に、父は政治狂で、山林から田畑まで全部を運動費につかつて、幾度となく議員選挙の候補者に祭上げられたあげく、一度も当選の喜びを知らずに、一人息子を一物に残して世を去つた。夏休が来ても、帰るべき家は人手に渡つてしまつたので、曲淵の一家にくつついて、その別荘みちにいる外には途がなかつた。以前は対等の友達づきあいだったのが、主従とまでは行かないでも、今では多少ひげ目を感じる関係になつていたので、彼の心持には始終滑なめらかでない陰影があつた。学業にこそ身を入れなければ、何をやっても器用な運動家で好男子の一郎は、富裕に育つ

た友達と一緒に、夏休といえ、恋の冒険の季節のように考えて、避暑地に集る美しい娘達の噂に夢中になつてゐるのだが、澤だけは仲間はずれで、気楽な連中を羨む心持と、軽蔑する心持とを保持つてゐた。自分はそんなのらくら息子とは訳が違ふのだと云う誇りに頼つて、密かになぐさめていた。

しかし、彼の心の中にも、つい近頃になつて、一人の女の姿がはつきりと浮ぶようになった。それは養子だつた。

養子は曲淵夫人の里の縁類の娘で、これも不幸な身の上だつた。事業に失敗した父親が、手形偽造の嫌疑を受けて自殺した後で、継母は他へ再縁し、兄は植民地の病院医として赴任し、外に頼る処がないので、曲淵の世話になる事になつた。甲子とは四才違い、

乙子とは七才違いの、今年二十一ではあるが、姉妹のためには家庭教師のような地位に置かれ、殊ことに体の弱い乙子のためには保母の役目さえ負わされていた。府立の女学校に通っていた頃は、女子陸上競技の選手として短距離競走の記録保持者レコードホルダーだった事もある。大柄で、色の白い、目鼻立のはつきりしたのが、大勢の中や、広々とした場所では、若い男の目につく姿だった。一郎の友達仲間でも、少なからず問題にしていたが、養子はそういう連中を頭から馬鹿にしていた。

澤は、自分と同じような恵まれない境遇あに在る養子に対して、素直な同情は先せんから持っていたが、恋らしい心持は最近までなかった。ひとつには、生来の己れを高く評価する性質が、不遇な人



を哀れみこそはすれ、自分と同等もしくはそれ以上のものとして考える事を妨げたのである。彼はむしろ、出来る事ならば家門の正しくかつ現在榮えている家の娘を、将来の妻として迎えたいと密かに願っていた。母親似の一郎とは違って、角張った父親に似た甲子ではあるが、自分の才能を見込んでくれるものなら貰もらいと云う望のぞみを、心の奥底に秘めていた時代もあつた。

それが、どうして養子を恋しく思うようになったかと云うと、やはり同じような境遇が結びつけたものと言う外ほかはない。おまけに一方では、甲子の彼に対する態度が、先方が女らしく成熟して来るに連れて、いよいよかけはなれたものになつて来たのも、自然と彼女に対する野心とも云うべきただならぬ心を薄らがせた原

因となつた。

一例としては、或時あるとき 麴町こうじまちの曲淵の本邸の庭にのぞんだ座敷に、甲子の友達が集つてゐるところを、何も知らずに澤が通りかかった事があつた。若い派手づくりの令嬢達の見る目にびくびくして、耳のかげまで赤くなつて足早に過ぎたが、何かささやき合う気配を感じたと思うと、

「あら、違ふわ。うちの書生みたいな人なのよ。」

と声変のしている甲子の打消すのが聞えた。続いて賑にぎやかに笑う声に追われるように逃げ出した澤は、屈辱くつじよくの念に堪たえられなかつた。自分とは全く違ふ世界の人間だと云う事が、常識の発達した実業家志望の青年の頭脳あたまには、別段の無理もなくはつきりと

わかった。

「どうせ私なんか犯罪人の娘よ。」

と、なげやりな口をききながら、腹の底にはしつかりした信念を持っていそうな養子の方が、段々親しみを増して来た。一郎にしても、娘達にしても、うきうき浮々とその日その日を遊び暮しているばかりで、取り止めた考かんがえというものは何ひとつ持っていないのに、養子とはとにかく学問にも実社会の問題にも多少の理解は持っている、同じ新聞を読むにしても、音楽会や運動会の記事に兄妹が興じている時、澤と二人の話は大人の会話だった。

「澤さんは羨しいわねえ。学校さえ卒業すれば、後は自分の腕次第でしょう。男はほんとにいいと思うわ。」

いつも養子は口癖くちぐせにして、女性の生甲斐いきがいなさを嘆いていた。気の毒な身の上と、女ながらも自力で何かしたいという意気と、世が世ならばと胸中ではなぐさまずにいなながら、さばさばしたとりなりの一切が、澤には気持よく思われて来た。

殊ことにこの一箇月半の鎌倉の生活が、一層二人を親しくした。澤が食当りで五日ばかり寝た時の養子の看護は、母親の慈愛あたたかの温さを知らない青年の心には、忘れ難がたいものに思われた。いつの間にか、澤は養子に対して苦しいような慕わしさを感じるようになってた。恋愛の冒険的の興味をついぞ知らない澤の事だから、恋は直すぐに将来の結婚の問題だった。身よりのない二人こそ終生の最もいい伴はんりよ侶だというような、真面目まじめくさった考も持っていた。と

にかく自分の心持だけはいい機会に打明けて、先方からもはつきりした言葉を酬むくいられたいと願っていた。心と心とが許しあつた男女の清い交際と云つた風な、感傷的な小説らしい空想が、彼の頭にはいつぱいだつた。

そこに、烟けむつたい主人夫婦の帰つた後の、解放された延のびやかな心持が、もくもく湧わきかえ返つて来た。一郎が友達を誘つてホテルに出かけて行く姿を、いつもならば苦々しく思うはずなのに、その日は同情にみちた微笑をもつて見送つた。

夕方の浜辺を散歩する人の数もめつきり少なくなつて、甲子を真ま先さきに、少し遅れて乙子と養子がつづき、最後に澤が、前に行まく三人の後姿に興味を持ちながら歩いて行つた。ホテルの涼場すずみば

の下を通つて、稲瀬川いなせのそばまで行くと、別荘の屋根が見える。そこまで行つて、女達は砂の上に腰を下した。

「澤さん、休め。」

養子が大きな声で号令をかけたので、姉妹は声を揃えて笑つた。  
「えんやらやつと。」

澤もあかるい気持で冗談をいいながら、昼間のぬくもりの残つて  
いる砂の上に両足を投出した。

磯の日細りて更ふくる夜半に

岩打つ浪音ひとり高し

かかれるとも船人は寝たり

誰にか語らん旅のころ

細く高い三人の肉声が、誰が始めたともなくうたい出した。澤はその傍で、初秋の澄んだ海気を吸いながら、誰でもいいから心から親しめる人のほしい、孤独感に<sup>まぶた</sup>瞼が熱くなりながら、星の出した海の上の空を、じいっと見つめていた。

四人が別荘に帰ったのは、すっかり夜になってからだだった。あかりの下で、めいめい勝手な雑誌を読んだり、編物をしたりしているのを、縁側の籐椅子に長くなって、澤は見ないようなふりをして見ていた。庭先の松の林の向うに、月の出の明るい色が段々濃くなって、見ているうちにまんまるい月が、ぐんぐん空にのぼって行った。

「あら、私櫛<sup>くし</sup>を落して来たわ。」

突然読みかけの雑誌を伏せて養子が叫んだのは、大分更けてからだった。少し旧式の大きい束髪そくはつに手をあてて、首をかしげたが、

「きつと先刻さつき休んだ所ですよ。その前には確かにあつたんだから。参円五拾銭落してしまつちやあ惜おしいわねえ。」

冗談を云いながら立上ると、縁側に出て空を見た。

「いい月夜だから、一寸ちよつと行つて見て来よう。乙子さん待つてらつしやい。直じき戻つて来ますから。」

「養子さん、一人でよくつて。」

編物の手をとめて、甲子が声をかけた。

「大丈夫ですよ。こんなに明るいですもの。」



無雜作むぞうさに答えて、後姿は歩き出した。

「僕が行つて来ましようか。」

澤は、機械体操でもするよ様な身の軽さで、椅子から飛下りると、あとを追つて庭に出た。

「いいえ、いいんですよ。自分で行きますよ。」

という女の声はつきりと姉妹の耳に聞こえたが、それきり二人とも行つてしまつた氣配だつた。

門の外の、雑草にまじつて芒すすきや野菊も延びている溝川のへりを真直ぐまっすに海に出ると、月夜のあかるさは一層はつきりしたが、西の方の空には大きな雲が重なり合つて、風も思いの外強ほかかつた。脚に巻きついたり、吹きまくられたりする白衣の裾を気にしながら

ら、養子は先に立つて歩いて行つた。

青貝入の西洋櫛は、澤の目にも覚えのある物だつた。きつとそこに落したに違いないと、確信をもつて養子の云う幾時間か前にみんなが並んで腰を下した場所を、共々に探したけれど見つからなかつた。

「どうしたんでしよう、確かにここに違いないんですが、拾われちやつたのかしら。」

養子は思い切れないで、幾度も同じ所を見て廻つた。父親が自殺する前に、珍しく一緒に散歩に出た時買つてくれた遺品かたみだつた。並みでない死に方をした父に対して、執拗しつような愛情を持っている養子には、なくなしては申訳がないという気持もあつた。

「やっぱりなくなしちやったのかしら。」

あきらめ兼かねて、砂の上に長く影を投げて佇たたずみながら未練らしく  
嘆息した。

「おや、雨かしら。」

たった一粒、ひやりとした頬ほっぺたに掌てのひらをあてて、澤は後の方の  
空を振仰いだ。先刻の雲が、月に向つてちぎれて飛んで行くので  
あつた。

「雨ですよ。」

そう云うひまもなかった。はげしい夕立が砂地を打って落ちて  
来た。二人は砂山の下の、昼間は海に入る人の着物を預かる葭よしざ  
簀ばり張の茶店の中にかけ込んだ。

月はまだまんまるく、高い処に澄んでいるのに、空の半分は暗くなつて、なかなか雨は止まなかつた。

「変な天気ですnee、気味が悪いわ。」

「明日が二百十日ですか。」

「いいえ、あさつてでしよ。」

葭簀の隙間から落ちる雨だれに身をすくめながら、二人は別々の心持で、不思議なその晩の景色を見て立っていた。

不意に、目の前の砂浜を手を引合つて駆けて行く男女の姿が見えた。頭から降りそそぐ雨を避ける場所がないので女は軽い叫さけび

声こゑをあげながら、男の力に引擦ひきずられて行つたが、間もなく大きな

漁船のかけにかくれて見えなくなつた。

「今の、一郎さんでしょ。」

養子にそう云われるまでもなく、それが一郎と、その友達の岡部の妹である事は澤も認めた。何か大きな事件でも目撃したような気持で胸がどきどきして、返事も出来なかった。

月はしばしば雲にかくれたり、又未練またらしく顔を出したが、雨はなかなか止まなかった。頭から肩へかけて、二人ともぐっしり濡れてしまった。養子の横顔を澤はいつにも増して艶つやつや々しく思った。

「養子さん。」

非常な努力で、澤が呼びかけた声は無慙むざんに震ふるえていた。

「僕は真面目に貴女あなたに聴いて頂きたい事があるんですが……」

ただならぬ男の語気に、身をかたくして振向いた相手の視線に射られて、澤は言葉が詰つまつてしまった。こんな事では駄目だぞと思いつながら、どんな態度も、どんな言葉も、この場合芝居めいておかしいものに考えられ、唇はすっかり乾いてしまった。

暫しばらく時の間、無言のまま、お互の呼吸を感じながら、二人は顔を見合っていた。

「澤さん。」

氣力負けして、足下の砂地に澤が視線を落した隙を見て、余程たつてから養子の方が口を切った。

「私は犯罪人の娘ですよ。」

驚いて澤が顔を上げた時、養子は強いて笑おうとしたらしかつ

だが、笑うだけのゆとりがなく、いきなり土砂降どしゃぶりの雨の中を、別荘の方に駆出した。

しまったと思ひながら、澤も直ぐす後から駆出した。

別荘の門に入る時には、雨はぱったり止んで、又まんまるい月が、けろりとした顔をして、滞りなく晴れた中空の風に吹かれていた。

「養子さん、櫛あつて。」

「遅かったわねえ、濡れちやつたでしょう。」

気づかっていた姉妹が縁側に出迎えた時、二人ともずぶ濡ぬれになつて着物の吸いつくようにぴったり肌にくつついたままの姿で、せいせい息を切らしていた。

## 二

九月朔ついたち日の朝は、南風みなみが真ま当と面もに吹きつけて、縁側の硝子戸ガラスを閉めると蒸暑く、あけると部屋の中のものが舞上しかたつて為方ながなかつた。

養子と一郎は姉妹の相手をして、円座をつくってトランプをしていた。一郎はしきりに調子づいて、ノオ・トランプを連呼つしていたが心の中はおちついてはいなかつた。昨夜は、岡部わぎが故意こゝろと二人のために席をはずして撞どう球きゆう場じやうへ行つた後で、翠子を誘さそつて浜辺に出た。月明なぎさの渚しづを靈山ヶ崎まで歩いたが、途中でひたひ



たの稲瀬川を渡る時は、多少躊躇ちゆうちよ躇ちよしている翠子すいこを、無理におぶつて渡つた。夕立が落ちて来た時は、そろそろホテルの方へ帰るところだったが、容赦なく降つて来たのをきつかけに、いきなり相手の手をとつて駆出した。

すくなからぬいたずら気分いっさんで、足の遅い女の倒れそうになるのも構わず、逸散いっさんにホテルの葭簣よしざ小屋まで駆足を続けた。暗い砂山の下くらいのその小屋についた時は、一郎さえ呼吸いきがはずんで口がきけなかつた位だから、翠子すいこは頭から裾すそまでずぶ濡ぬれで、苦しい息づかいをしながら、

「随分ずいぶんひどいわ。」

と言おうとしても、言葉は唇まで出て来てくれなかつた。雨に

濡れた全身に、熱い汗が蒸すように湧いて来た。もう一步も進む気力はなく、手を放せばそのまま膝をついてしまいそうな姿に見えた。一郎は、途中でぬいで左手に持っていた下駄を砂地に捨てると同時に、両手を広げて相手のちいさい体を抱いた。抱きしめると、自分の着物の濡れているのが、殊ことに強く感じられた。香料の匂う束そくはつ髪はつの額を胸につけて、死んだように動かない翠子の様子に、すっかり安心して、目の前にほの白く見える頸うなじに軽く接吻した。

その時の事を想い出すと、妹の相手をしてトランプなんかしているのが馬鹿馬鹿しくて為方しかたがなかった。今日も午後からホテルの庭で、岡部と庭球をする約束になっっていて、翠子もきつと来る

と誓っていたのを考えると、早く午後になればいいと思うばかりだった。自然と、冒険的に骨牌かるたを打つ気分だった。

澤は風邪かぜの気味で鼻をつまらせながら、微熱の体を籐椅子の上に横たえていた。

「澤さんは意気地いくじなしねえ。私だって昨夜ゆうべはびしょ濡になっただけ  
れど、平気だわ。」

何事もなかったような晴々した顔附で、養子はトランプの手をやめては冷かひやしていたが、澤は苦笑するばかりで、縁側の外におびただしく延び繁った台湾葦の風に吹かれて白い葉裏をかえすのを見ていた。熱を持って鈍く重たい頭の中で、面白くない事ばかり考えていた。

それは、自分が養子に対して、時機の熟すのを待たなかった事の後悔が主なものであった。先方が、曲淵一家の中にあつて、人一倍自分に親切にしてくれたのは確かだが、それが特殊の意味のあるものだったかどうかはわからない。幸福でない自分の境遇に対して、先も<sup>さき</sup>不幸な身の上から、単に同情しているだけなのかもしれない。澤はふと、ついこの間雑誌で読んだ<sup>ある</sup>或有名な富豪の立志物語を想起した。

幼くて両親を失い、祖母の手に育てられた若者は、土地の百姓の家の作男に住み込んだ。その時、その家の女中が、他の男達に対するよりも一倍親切に尽してくれた。どうしてもただの親切とは思われないで、或晩密かに忍んで行くと、女はいきなり<sup>よこつ</sup>横

面をひっぱたいて、「身よりもなくて可哀かわいそうだと思つて、目をかけてやれば、つけあがりやがつて、生意気な真似まねをしやあがる。」と云う意味の言葉を浴あびせかけた。這ほうほう々の態ていで逃げ出すと、その夜の中に決心うちして東京を志し、辛苦の末に百万長者になつたと云う話だつた。

澤は、それが自分の話でもあるような羞しゆう恥うちに、思わず知らず顔が火照ほつた。

けれども、又また一方から考えると、養子の示した態度には、横面を張飛ばすような侮辱はなかつた。貴方はまだ学生ではありませんか、そんな事を云う時ではないじゃありませんかと、たしなめる心だつたかもしれない。そう想いかえして、やや救われた心持

になる事も出来たが、何にしても自分のひけめを感じるのは、消す事が出来なかつた。

「ハアトでテン。」

突然養子のはしやいだ声に、澤も座敷の方に首を向けた時、

「ノオ・トランプ、テン。」

直ぐさま一郎の上手うわてを行く、勝ほこつた声が聞えた。

その瞬間に、遙かにずしんと響く異様な音響がしたと思う間もなく、大地を揺ゆつて上下動の地震が来た。家はめきめききし軋み、畳は湧きかえるように持上つた。

澤は夢中になつて身を起すと、僅わずかに隙間のあつた硝子戸の間から、庭の芝生に一飛びに飛んで出た。足が地面につくと共に、も

くもく動く大地の力にはねとばされて転倒したが、その時家の方を見ると、瓦は飛び、硝子は砕け、今にも滅茶滅茶に壊れそうな座敷の中で、四人の立騒ぐ姿がはつきり見えた。一郎は、甲子を引擦るように抱きかかえて、崩れ落ちる鴨居の下を潜って、よろめきながら出て来るところだった。二人が縁側から飛び下りたときに、物凄い音を立てて、家は柱を折って倒潰した。澤はその家の崩れ落ちる瞬間に、逃げ遅れた乙子をかばって畳の上に突伏した養子の姿を見た。

「乙子ちゃん、乙子ちゃん、乙子ちゃん。」

あらん限りの声をしばって泣き叫びながら、妹思いの甲子は物狂おしく駆け廻った。澤と一郎は真蒼になって顔を見合せたば

かりで、一言も物を言う事は出来なかつた。どこから出て来たのか老犬は、おびえ切つた様子で尻尾を振りながら倒れた家の廻まわりをかけ廻まわっていた。

「乙子ちゃん、乙子ちゃん、乙子ちゃん。」

甲子は叫びつづけながら、今にも失神しそうな有様で、一郎の胸にしがみついた。

裏手の方から、じいや夫婦と女中がかけつけた。

「ちいさいお嬢様は。」

「駄目だ。養子さんと二人共やられちゃつた。」

真まとも当ま面にじいやに顔をのぞき込まれるのがいやなので、泣叫ぶ

甲子を女中の手に渡すと、一郎はいきなり倒れた家の屋根に上つ



て、瓦をめくり始めた。

倒れた家には隙間がなかった。一枚二枚手あたり次第に瓦をつかんでほうり出したが、何の甲斐かいもない事は直ぐわかつた。その上地震はまだ止まないのので、一郎は又芝生またに立戻つた。

「じいや、人にんそく足を多勢呼んで来てくれ。」

何を愚図ぐずぐず愚図ぐずぐずしてるんだと、叱り飛ばす権幕だつた。

「若旦那、駄目で御座ります。この界隈かいわいには無事なうちは一軒もありやしません。みんなで鋤すきでも鋤くわでも持つて来てやつて見る外ほかはありやあしない。」

じいやは曲つた腰を振つて、裏の物置の方に行つた。

一郎も澤も、家のつぶれたのは自分達ばかりでない事に始めて

気がついた。あんまり意外な大地震に驚愕きょうがくして、他人ひとの事なんか考えるひまがなかつたのだ。ああそうかと思つて附近を見ると、今まで立っていた方々ほうほうの二階家も見えなくなつて、真青まっさおに晴れた空が広々と見渡された。一郎は急に、乙子や養子の外に、一の鳥居の岡部の別荘の安否が気になり出した。

誰も彼も、下敷になつた二人は圧死したものと思つていたが、甲子の外には涙を流す者もなかつた。ちつとも勢が衰えず、ひつきりなしに揺れる地震の脅威かなしに、悲む余裕さえないのであつた。

澤は、真先まっさきに逃げ出したのが済まない気持はしながら、殆んほとど気力を失つて、何もする事が出来なかつた。風邪かぜ気で熱のある頭の重たさに悩んでいたのだが、そんな気持は消えてしまつて、

はげしく動悸どうきのする胸を押えて佇たたずんでいた。彼の頭には、下敷になつた二人の事ばかりが渦巻うずまいていた。殊ことに養子が、むごたらしい死骸になつてしまつた事を想像すると、昨夜の月光を浴びて立っていた姿や、ずぶ濡の姿が嘘であるか、今の地震が夢であるか、どつちか一つに違いないと思われた。

いつまでも地震は止まなかつた。じいやの持つて来た鋤や丸太で、男達はしきりに崩れた家のどこかをこじあげようとしたが、きつしりと組合つたまま落ちた家は、微塵みじんも動かなかつた。芝生に倒れて泣いている甲子の側そばで、老犬は空に向つて唸うなるように吠ほえていた。

「おや、変な音がするぞ。」

やけになつて、丸太で屋根瓦をなぐりつけていた一郎が、振上げた手をそのまま、澤をかえりみた。海の方から、無数の屋根板を吹き飛ばすような、ばらばらばらばら云う音が聞えて来た。

「海嘯つなみじゃあないか。」

地震の後には海嘯があるといういい伝えと、昔鎌倉に大海嘯があつて、大仏の御堂もさらわれたと云う記録を思い出した。

「海嘯だ。逃げろ。」

耳をすましていた一郎が上ずつた声で絶叫した。女達は一齐に門の方へ駆出した。

一郎は追いつがつて、甲子を扶たすけながら、半分落ちた石橋を越えて往来に出たが、もうその時は海岸から、必死になつて山手へ

逃る人で、狭い道はいっぱいだつた。半分水浸しになつたのもあり、顔や手足に負傷して、血をしたたらしているのもあつた。

町の店家も、一軒として満足なのはなかつた。両側から倒れて道をふさいでいるのを踏越えて、一番近い裏山の松林まで逃げた。見る間に沢山たくさんの人数が、そこに避難して来た。幾度も途中で膝をついてしまいそうな甲子を抱えて来た一郎は、自分も息が苦しくなつて、大きな松の木の根方に腰を下した。昨夜の雨のまだ乾かない雑草の上に横倒しになつて、甲子は又袂たもとで顔をかくして泣き出した。

「乙子ちゃんは、乙子ちゃんは、乙子ちゃんは。」

つぶやくように、祈るように妹の名を繰返していた。一郎は手

のつけようもなく、膝を抱いて黙していた。いったんはちりぢりになった同勢が、澤を先に、じいやを最後にして、一所に集つた。乙子や養子は、どうせ死んだには違いないが、捨てて逃げて来た気持がして、誰しも申訳のない心持を持つていた。ここまで来ても、まだ海嘯が来そうな気がして、口もきけなかつた。別荘のある山の下一帯は、既に全く海になつたであらうと想像していた。

後の山はそいだように崩れて、赤い肌が生々しく、なお絶間なく岩石のなだれ落る音が凄かつた。東と西に火の手があがつて、急速に打つ警鐘は、山々に響いてこだました。水に追われた人と、火に追われた人が、今にも大きな地割がして、総ての人類は埋もれてしまいそうに脅かす土を踏んで、松林の中にかたまつていた。

素早く戸板や座ぐせを持って来て、仮の場席をこしらえ、怪我人けがにんや子供を寝かしているのもあった。

「こりやあ、こつちも座でも探して来なくちやあなるまい。」

あつちこつち、見知越みしりごしの顔を見付けては、ひそひそ話をして

いたじいやが、相談するように一郎の顔をのぞき込んだ。

「駄目だよ。もう、うちの近所は海になつてゐるだろう。」

俄にわかに悲しさに堪たえられなくなった声が著しく震えた。

「なあに海はえらく引いてゐるそうです。二里も三里も干潟ひがたになつたつて云つてます。」

「引いてゐるつて。それじゃあ海嘯は来なかつたのかい。」

「来たには来たけれど、直じきに引いてしまつたそうです。一寸ちよつと

行つて見て参りましょう。」

悟り切つた顔をしているじいやは、いい捨てて歩き出した。

「待つてくれ。僕も一緒に行こう。」

非常な決心を示した態度で一郎は立上つた。

「およしなさいまし。まだぐらぐら揺れてますから。」

ばあやがあわてて引止めた。

「なあに、じいやが行ける所なら僕だつて行けるよ。」

「それじゃあ僕も行こう。」

澤も、自分一人安全地に残っているのは心がとがめるので、直すぐに一郎と肩を並べて歩き出した。

「直ぐ帰つて来る。大丈夫だ。もう大きいやつは来やあしない。」



男達がみんな行つてしまふのだと思うと心細くなって、甲子の泣声なみこゑが又高くなつた。

松林を出ると、先刻さつき上つて来た一筋の坂が、見るかげもなくなつた。長谷はせの町へ真直まっすぐに続いている。三人は黙々として下つて行つた。どおんと遠くで土の落るような音がすると、間もなくぐらぐら揺れて来る地震も、今ではもう怖くはなくなつていた。一郎も澤も、乙子と養子の無慙むざんな死に対し、又あんまり無雑作むぞうさに人間が压倒された自然現象に対して、腹立たしい自棄やけの心持から、死んでも惜おしくないような氣持だつた。

町筋の倒れた家のあたりでは、一たん逃げたのが又戻つて来て、男も女も家財を取出すのに血眼ちまなこになつていた。もう一揺り来れ

ば、ひとたまりもなさそうな半つぶれの家にさえ踏込んで行く人間の、財貨に強い執着を持っている有様を、一郎も澤も苦々しく思った。自分達が今行こうとする所には、二人の若い女が死んでいるのだと思うと、ただその人達が無事でさえいてくれたら、他の事はどうでも天に任せると云う気持もあつた。

海へ行く道を曲ると、六尺とはない狭いところへ、両側の家の石垣や塀が倒れたり、所々地割のした場所もあつたが、みんなが想像した程水は来ず、別荘のある近所は、僅かに浪頭がかぶつた位と見えて、砂地が汚ならしく濡れているばかりだった。

「浪は来なかつたんだね。」

圧死した二人は、その上に海嘯にさらわれたものと想像してい

たが、それだけは免かれたのを知った。澤は黙つてうなずきながら、目の前に倒れている屋根の下に、紫矢やがすり飛白めいせんの銘めい仙せんの着物に赤い唐縮緬とうちりめんの帯をした乙子を抱いて、白地に秋草模様のゆかたを着た養子が死んでいるのだと思つて暗然とした。

じいやが丹精した花壇は、一段低い処なので、潮の最後の延長が届いたと見えて、まだ濁水の漂つているところもあり、ダリアや菊や早咲コスモスの丈の高いのは根を洗われて倒れ、土を這はう松葉牡丹まつばぼたんや脊の低い水引草は砂に半分埋れていた。どこの飼猫か、首輪に赤いリボンを結んだのが、汚れた腹をさらして死んでいた。三人は台湾葦の繁みが自然の垣根をつくつている庭先へ廻つて行つた。晴れた日の午後の芝生は広々と青く日に光つていたが、

その真中に、輝くばかり反射する紫の色が、葦の葉の間からはつきり見えた。息の止まる前のような叫声をあげて、三人は一度にかけ出した。

立上ったのは養子だった。足下には紫矢飛白の乙子が、芝草に取とりすが縫ぬいった形で、真まっさお蒼な顔をしてうずくまっていた。三人の方を見るには見たが、地面から顔を上げる気力はなかった。しかし生きていると知ったので、一郎は嬉し涙に咽喉のどの詰まった声で、

「乙子、乙子。」

と繰返しながら、倒れるように膝を折って、その上に妹の体を抱起した。乙子は、兄の胸に喰くいついて背中に波を打たせて泣き出した。

側では養子が、異常の脅怖きょうふに上ずっていた目に俄にわかにいつぱい涙を浮べて、澤の方に手を差延ばした。澤は躊躇ちゆうちよしずしずその手を取って強く握りしめた。

「いったい、どこから出て来たの。」

実は死んだと思っていたと云おうとして口をつぐんだ。

「わかりません。たった一箇所あかりのさしているところがあったので、そこから出て来たんですけれど、出られたと思う嬉しさで夢中になって、今考えてもわかりません。」

養子の話を聴くと、澤が一番早く庭先へ飛出し、一郎が甲子を引立てて立上った時、自分も乙子を抱だきあげ上る積りつもだったが、足下がきまらないので力が足らず、もういけないと思つた時は、既に

天井が落ちて来て、真暗になってしまった。それからその暗闇やみを探りで、あちらこちら這い廻ったが、どこに行つても木材に妨げられて行どまってしまう。誰かが助けに来てくれるものとは思つていたが、その間幾時間たったものかわからない。不意に明るい外光がさし込んで来たので、ようやくそこまでたどつて行くと、体の出られるだけの隙間があつた。先まず乙子を先に出し、自分が続いて外に出ると、助かつたと思う嬉しさに、どこから出て来たなどと云う見極めのつく考えなんか毛頭なく、芝生の真中に行つて、一安心したところだつたと云う。

どこから救いの日光がさし込んだか、三人は養子の心こころあたり当で指さす辺を熱心に見て廻つたが、木材と木材はきつしり喰い合つ

ていて、一寸の隙間さえ見出せなかった。

養子は手足に少し擦過傷さつかしやうを受けていたが、それも大した事はなく、乙子は異常な恐怖に病的におびえて貧血していたけれど、着物の裾が裂けているばかりだった。

「とにかく無事でよかった。愚図愚図ぐずぐずしていて又海嘯が来てやられてはつまらないし、火事もこつちが風下だから、何か持つて行けるものだけ持つて引上げよう。」

一郎は乙子を養子に渡して、じいやと澤と三人で物置の方へ廻つて行った。

蘆あしと戸板と丸太と縄を持つて、いそいそした心持で松林の避難所に帰つて行ったが、一郎の心には岡部の事がいっぱいだった。

乙子と養子が助かったので、気が楽になると同時に、友達の家  
の安否をたしか確かめなくては済まなくなつて来た。危難にのぞんで  
いる翠子を救い出す勇士の役目に自分をあてはめて考えると、  
運動で鍛えた体を働かせたくて堪らなくなつた。

「僕は、岡部のところに見舞に行つて来るぜ。」

丁ちようど度松林の下の坂の上口まで来た時、一郎は思い決して澤に  
云つた。

「およしなさい。遠走りすると危のう御座いますよ。後でじいや  
が行つて来ますから。」

そう云つて止めたけれど、一郎の心は既に駆出してた。

「大丈夫だ。直すぐ帰つて来る。」



いきなり両手に持っていたいろんな物をじいやに押つけると、くるりと背中を見せて、正式に練習の積んだ姿勢で逸散いっさんにかけ出した。

## 三

土に敷いた藁の上に、甲子と乙子を取囲んで、澤と養子とばあやと女中達は、変災の話から、お互の無事を祝い合い、又この先またどうなるかを心配して、同じような言葉を幾度となく繰返していた。じいやは食料を探しに行つて、なかなか帰つて来なかつた。

地震は間断なくやって来た。そのたびごとに姉妹は抱合つて泣

いた。東の方の火事は停車場の方に燃えて行つたが、西の方の火の手は段々迫つて来て、黒い烟けむりは松林にもかかつて来た。澤と養子は、万一この山が燃えるような事があつたら、もう逃げ道はあるまいと、心々に思つていた。

養子は着物を短く端折はしよつて、膝から下をむき出しに日に曝さらしていた。徒歩競走の選手だっただけあつて、女にしては長く、生れつき色の白い滑なめらかな皮膚に薄青く静脈の透いて見える二本の足は、澤の目の前に艶なまめかしく並んでいた。多分、倒れた家から出て来る時に受けたのであろう。膝頭を擦すりむいている外ほかに、沢山たくさんの擦過傷が、血のあとを残していた。

「痛みはしませんか。」

黙って見ているのはかえってうしろめたくて、澤はわざと眉を  
しかめて聞いて見た。

「いいえ。ほんのかすり傷ですもの。」

「名誉の負傷ですか。」

呑気らしい事を云ったなど思ったが、養子はそれには答えない  
で、

「澤さんはひどいわ。私達を扶たすけようとしなくて真ま先さきに逃にげ  
てしまふんですもの。」

と、ふだんの通りの快活な口のきき方で、斬きり込んで来た。何と  
かうまく引ひけずそうと思つたが、手痛い冗談だったので、澤は咄と  
嗟つに返事が出来なかつた。自分がいちやく逃げた事に対して、

先刻さつきから心の中で、恥じたり弁解したり、一人で苦しんでいたのだつた。あの場合に、自分は縁側にいたので、直ぐすに庭へ飛下りる気になつたのだが、もしみんなと一緒に座敷にいたら、きつと養子を扶けたに違いない。逃げ道に一番近くいたのが自分の不運なのだ、彼はひどく悄気しよげてしまつた。

「私達なんか死のうと生きようと、御自分だけ助かれればよかつたんでしよう。」

何の悪気もないのであろうが、養子はつけつけと畳みかけた。「そんな事があるもんですか。」

流石さすがに少しむつとして、澤は養子を真当面まともに見ながら、やはり弁解の言葉に苦しんでしまつた。その様子をじつと見守つていた

養子の目には、いたずらな微笑が浮んでいた。澤は逃げるように、視線をそらすと、そこには老犬が疲れた形で長々と寝そべっていた。ふと、畜類の身の上うちやまが羨しく思われた。地震があらうが、火事があるが、犬は人間ほど程苦しみはしないだらうと思つた。一面には養子に対するまぎらかしもあつて、軽く口笛を吹いてみた。犬は薄目をあいて彼の方を見たが、直ぐに又眠つてしまった。

缶詰類と麵パン麩を買込んで、じいやは手柄顔をして歸つて来た。方々で聞いた話を、又みんなに聞かせながら、たつた今人にせがんで貰もらつて来た一本の巻烟草まきたばこを、さも惜おしそうにふかした。

日が西の方に廻つて、松林の中が薄暗くなりかかった頃、心配していた一郎が疲れ切つて歸つて来た。ただならず緊張したその

顔を見ると、皆の胸はどきんとした。

「どうしたの。無事だった。」

澤がきくと、一郎は頭かぶりを振って、

「きようだい共死ともんじやった。家がつぶれて火事になって焼死んだんだ。」

詳しい話をしようとする積りつもだったが、唇が震えて云えなかつた。一郎は塵の上にうつぶせに身を倒したきり、暫時しばらくは動かなかつた。

「まあ、ごきようだい共。」

養子が僅わずかにこれだけ云ったばかりで、みんな暗い心持になつた。甲子と乙子がすすり上げて泣き出した。

横浜の貿易商の子で、当世風の派手好はでずきの兄妹を、養子は平生好きでなかった。一郎がみつともない程翠子の歡心を得ようとしてゐるのなんか、腹立たしくも思われたが、無慙むざんに死んでしまったのかと思うと、いきいきした表情を持っていた翠子の姿が、いたましく浮んで来た。おもわず涙ぐんだ目を伏せると、長く延ばした自分の脚に、今日の最後の薄日がさしていたが、その擦り傷の血の滲にじんだ所に二疋ひきの蠅はえが止まっているのを見た。そつと手で払ったが又やって来た。ちいさないきものに対して、養子はむしろ親しい心持を起して、脚を擦り合せたり、翅はねを振ったりしている微妙な運動を見ていたが、今度は追いもしなかったのに、ふと一疋が飛んだと思うと、もう一疋の背中に下りた。くるくると二三

度もつれあつたと思うと、完全につるんだ。養子はふと、澤の視線が自分の足に落ちてゐるのに気がついて、顔があかくなつた。

澤も気が付いて赤面した。それでも、彼は、岡部の悲惨な死しにぎ

態まや、せっかく恋を得た一郎の気の毒な心に対する同情で胸が  
いっぱいになりながら、養子と自分が無事で、こうして並んで坐  
つてゐる幸福を頭の中では強く考えていた。



# 青空文庫情報

底本：「銀座復興 他三篇」岩波文庫、岩波書店

2012（平成24）年3月16日第1刷発行

底本の親本：「水上瀧太郎全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年発行

初出：「随筆」

1924（大正13）年1月号

入力：酒井裕二

校正：noriko saito

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

九月一日  
水上滝太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>